

はじめての

# 万葉集

日本に現存する  
最古の和歌集「万葉集」を  
わかりやすくご紹介します

vol.117

## 「笠の山」と「雨」

この歌は「石上乙麻呂朝臣あそみの歌一首」と題された一首です。通常は「石上朝臣乙麻呂」のように氏・姓・名の順で記すところ、ここでは姓の「朝臣」を後にすることで敬意を示す書き方が採られています。「朝臣」という姓は立派な家柄を表し、天皇の子孫に与えられた「真人まひと」に次ぐ位置づけです。乙麻呂の父は物部連麻呂ものべつらむろという人物でしたが、天武天皇の時代に氏・姓が変わり石上朝臣麻呂になりました。非常に高い地位まで上り詰めた高官で、その子である乙麻呂もさまざまな経歴を経て昇進しています。亡くなる前年の天平勝宝元(七四九)年には中納言にまで上りました。

ただ、乙麻呂の人生は好調な時ばかりではなかったようです。天平十一(七

雨ふらば 着むと思へる 笠の山  
人にな着せそ 濡れはひづとも

石上乙麻呂いそのかみのおとまろ 卷三(三七四番歌)

**訳** 雨が降ったら私がつけようと思っている笠という名の山よ。他人にはつけさせるな、どんなに濡れてしまおうとも。

三九)年三月には女性問題で土佐へ配流されたことが、『続日本紀』や『万葉集』(巻六・一〇一九〜一〇二二)に記されています。久米若売くめのわかめという女性に密通したことが原因で、若売も下総に流されました。乙麻呂がいつ帰京したのか記録がありませんが、その後の任官からみて数年で許されたものと考えられます。密通事件と今回の歌との前後関係が気になりますが、巻三の配列から、事件で流される六年以上前の歌と考えられます。

味していると考えられます。他の人がどんなに辛い恋をしても、そちらに寄っていかなくてくれ、と歌います。この歌は「雑歌ぞうか」に収められており、純粋な恋の歌(「相聞さうもん」)とは見なされていません。「笠の山」を題材に、たとえを用いて詠んだものですが、内心には思い浮かべる女性がいたのかもしれない。

(本文 万葉文化館 阪口由佳)

今回の歌にある「笠の山」は、奈良市にある春日山の西峰、御蓋山みかさやまを指すとみられます。この歌の前に山部赤人が春日野に登って詠んだ御蓋山の歌(巻三・三七二〜三七三番歌)があり、関連する可能性が指摘されています。

この歌の「笠」は山の名だけでなく好きな女性を重ね、雨は切ない恋心を意



## 万葉ちゃん つばき

和歌や作者などに  
関連するものを  
紹介するよ!



万葉ちゃん

## 御蓋山

左右対称のなだらかな笠の形をした御蓋山は、春日大社本殿東側に位置する標高293mの山です。古くから神山として崇敬の対象となっており、春日大神様の御神域を守るため、現在まで原生林として保たれています。また、春日大社の創建神話の舞台としても知られています。



所 奈良市春日野町  
園 春日大社  
☎0742-22-7788